
D / R

幻灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D / R

【Nコード】

N2091C

【作者名】

幻灯

【あらすじ】

間違つて、愚かで、避けられない。

EP 1

序章

カチカチ。

カチカチ。

時が流れる。

その流れに、身をゆだねる。

夜。

海岸。

波打ち際。

目の前には大きな月。

隣で微笑む彼女。

ずっと前から感じていた事がある。

ずっと前から話したかった事がある。

繋いだ手を、もう一度確かめる。

月明かりの下で、僕らは約束をした。

EP 2

「それは、始まる前から始まっていた -

深夜。

古びた寺院。

天蓋がなく、月の光でさえ永久に入らないだろうと思われる場所に二人の人物がいた。

少年と少女。

整った顔に闇のような黒い瞳、無造作で少し黒がかかったブラウンの髪をした少年。

足までかかる紺色のコートを着ていて、少年と足とほぼ同じ長さの剣を携えている。

名はカイト。便宜上、今はそう名乗っている。

対する少女の方は、少年とはちがって両手に銃を構えている。

この国には銃なんてものは存在しない。

おそらくは遠国の者を使っているのだろう。連射可能な小銃二挺。

少女は少年と同じくブラウン色の髪だ。肩まで伸びていて、そこだけ少年と違っていた。

黄色の瞳が、周囲の様子を把握するために世話しなく動いている。

整った顔をしており、体型は多少小柄だが年相応の発育具合だ。

名はセルフィ。

「正直、こういうのは僕に合わないと思うんだよね」

「だってしょうがないでしょ？ここ最近、依頼がなくて退屈なんだもん」

「とは言ってもさ、せめて受ける依頼を選んでよ。セルフィ」

「だって報酬は弾むって話だったんだもん」

「お金に困って無いくせに」

「何か言った？」

「いや、何でも」

セルフィはにつこりと笑いながら続けてこう言った。

「何かあったら助けしてくれるんでしょ？カイト」

どうしても違和感のある自分の名前を呼ばれ、『僕』はふうつと息を吐いて、セルフィに聞こえないようにぼやく。

「かえって僕が助けてもらう立場になるかもね」

依頼が来たのはちょうど二日前の午前のことだった。

その時間帯、僕は春の日光を浴びながら机に突っ伏してウトウトと船を漕いでいた。

まさに至福の瞬間。極上の時。

あと二、三刹那ほどで安らかなる眠りに堕ちようとした時、

突如鼓膜を突き破らんが如く音をたてて、セルフィが僕の部屋のドアを猛烈に、かつ勢い良くドアを開け放った。

「！！！！」

「カイトー！！依頼人が来たよー！やったやった！三週間と二日ぶりの依頼だよー！」

「・・・・・・・・・・」

「あれ、どうしたの？嬉しくないの？嬉しいでしょ？嬉しいに決まってるよね」

「・・・・・・・・・・め」

「んっ？何か言った？」

「この・・・安眠妨害者め」

その後、その部屋からは何やら悲鳴が聞こえてきたとかこないとか。

「盗賊を捕まえて欲しい・・・ですか？」

変に髪の毛がボサボサになったセルフイが依頼人に確認するように尋ねる。

ちなみに髪は僕の仕業。

応接間に、依頼人と向かい合う形で座る。

僕の隣にセルフイ。そして向かいには依頼主のシュレハッドさん。シュレハッドさんは三番街の市場の責任者で、農業経営をやっているとか。

少し痩せてて、髪の毛がだいぶ薄い、見るからに努力の人。

いや、努力の人っていうのはボクの先入観だけだ...

「それで、その盗賊というのは？」

「ええ、二年前からちよくちよく盗んでいくやつらがいました。たいた量じゃなかったんで少しくらいならと大目に見てたんですが・・・」

「数も増えて、盗む量が増えたり？」

「そいつはまた典型的な・・・」

「はい。それに・・・、次第に盗むのが当たり前と思ってきているらしくついには要求をしてきたんですよ」

「・・・」

「仕方なしに一度は要求を呑んだんです。そうしたらもつとよこせと。」

次第には畑に火を付けると脅し始めまして・・・。とうとう暴力沙汰まで・・・」

「実力行使に出た・・・と」

少し考える素振りをするセルフイ。

「・・・」

僕は一部始終黙って聞いていた。

「話は大体分かりました。それで私達にそのやっかいな奴らを捕まえてほしいと」

「ええ。本当は自警団にでも相談すれば良いんですけどね・・・」

「誰でもやっかいごとは嫌ですからね。では彼らが立ち入るところや出没するような所を

お知りでしたら・・・」

「僕はね、今だに君がこんな職を始めた事に納得出来てないんだよ。一生働かなくても食べていけるだけの財産が君にはあるのに、請負業だなんて面倒な仕事・・・」

依頼人が退出した後、僕はセルフイに何度も話した事をまた言った。「お金は私が稼いだものじゃないし、困った誰かを助けるには『請負』が一番妥当でしょ」

そしてセルフイは何度も繰り返した返答をまた言った。

「皆の笑顔を守るため、ガンバルー」

一人気合を入れるセルフイ。ため息について、力なく僕も「がんばろー」と続いた。

盗賊の巢は、郊外にある寺院だった。鬱蒼とした森の中に、それはある。

確かにアジトにはもってこいのシチュエーション。

シュレハッドさんの話によると最初は三、四人だった盗賊が、今では数十人に昇っているとか。

「まったく、なんで悪事なんてするんだらうね？」

ふうとため息をつきながらセルフイは愚痴る。

「悪の入り口は結構広いんだ。その癖極めるのがかなり難しい」

「それはそうだけど・・・」

「今更そんな事言っても仕方ないでしょ、セルフイ。」

そもそも請負業をやる以上、『悪』っていう素材が僕らには必要なんだ」

「あれ？さっきまで請負業に否定的だったのに、なんか肯定的になつてない？」

「僕はね、君が請負業をやることに否定的なの。請負業それ自体は嫌いじゃないよ」

「ふうーん？」

「何さ」

「ううん、何でも」

銃を構えながら、先に進むセルフイ。

「でもカイト。何も持たなくても良いの？」

剣とか、銃とか。武器は存在自体が敵に対する抑止力になるんだよ？」

「今はいらない」

はあーと何度目かのため息を付くセルフイ。

「殺されてもしらないよ？」

「せいぜい頑張るよ」

寺院の内部は少し複雑な構造で、だけど、迷う事は無かった。

さつきから僕達が、要らない無駄話をしているにはわけがある。

それはこの廃墟となつた寺院の中に入った瞬間に、ある事に気付いたから。

いや、気付かずにはいらなかった。

もつとも、その『気付いたこと』のおかげで迷わずに進めているんだけどね。

異常なまでに湿った空気に、強烈過ぎる血の臭いのおかげで。

一歩進むたびに、その臭いは強くなる。

生存者《盗賊》がいるなんて、これっぽちも思わない。

だって、この臭いのキツさだけで、シュレハッドさんが言っていた数十人分に相当するというのが容易に理解出来るから。

予想は確信に。

確信は絶対に。

廊下、一番奥。

臭いの根源であり、起源である場所。

思い至る。

僕は、同じ事をしていると。

二年前のあの日と、まったく同じ。

扉の前に立つ僕達。

ドアの隙間から漏れ出る、湿った空気と、異臭。

ドアノブに手をかける。

心臓がドクドクとなる。

自然と冷や汗が流れでる。

ガチャリとゆっくりと開けた。

少し高い、耳障りな音を立てながら、扉は開く。

その光景は予想を遥かに超えていた。

もちろん、皆が死んでいるという予想は外れてない。

ただ、殺され方が尋常じゃなかった。

室内全体に赤い水溜りが深く出来ており、四方を囲む壁は全て赤く染まっけていて、

壁の地の色が全く見えない。

廊下に散らばる残骸。

脳漿、腸、胃の一部、骨、先が無い足、首から上が無い胴体、首から下が無い頭部、一本一本切り取られた指、
脳、何かよくわからない臓器。

一つとして同じ破片がなく、全て完璧に破壊されていた。
やばい。

この部屋は、やばい。

これは、魅せられる。

どうしようもないほど、それこそ本能のレベルで、僕は魅せられる。
この、とてつもない狂気に魅了される。

声が出ない。

声が出ない。

声が出ない。

呼吸すらままならない。

呼吸？呼吸ってなんだ？

生きるために必要なことだ。

あれ？

生きるってなんだ？

あつてはならない世界。

存在してはいけない世界。

その世界に、唯一、生存者がいた。

部屋の中央、血の海の上に立つ、一人の人物。

背中を僕達に向けるようにして立っている。

闇色の、フードが付いた全身を覆い隠すかの様なコートを着ている
為に、

その後姿からは性別すら判断出来ない。

その人物はこちらに振り返る。

フードを深くまでかぶっているから、表情すら読めない。
見えるのは口元だけ。

「貴方達、だれ？」

無機質な、あまりにも無機質過ぎる声。

聞くだけで、背筋が凍る。

死の声。

その声から、『人物』の性別は女。

恐らく、僕達と同世代。

「僕達は・・・」

「ちよつと依頼があつてね」

僕を遮り、セルフィが続ける。

「ここにいる盗賊を退治してくれっていうね」

「・・・盗賊？」

「そ。でも貴方がそれを先にやってくれたのね。

ありがとう、おかげで手間が省けたわ」

あゝ、これだ。

正義感が強いセルフィだ。こんな惨状を見て、だまっていられるはず
が無い。

これだからセルフィと一緒にいると、

こっちまで楽しくなってきたやうだよ。

「ただ、貴方の『退治法』がちょっとキツいんじゃないかなって？」
銃の安全装置を外すセルフイ。

「だって、邪魔だったものだから。」

『人物』は右手を胸の前に突き出す。
そこから薄ぼんやりとした光が生じ、瞬間、その手に刃身の長い剣が握られていた。

剣は刀と呼ばれる種類のもので、刃にはべったりと血が付いていた。
数十人分の血が。

「魔術を使える・・・か」

こんな手持ちのなまくら剣じゃ、無理だな。
僕は仕方無しに構える。

『人物』は刀を地に下ろす体勢のままで、微動だにしない。

無音。

静寂。

聞こえるのは三人分の呼吸音。

それに天井からポタリポタリと滴り落ちる、血。

ポタリ。

ポタリ。

ポタリ。

ポ・・・。

四度目の音が聞こえることはなかった。
変わりに銃声と、その放たれた弾丸を弾く音が聞こえた。

立て続けに三発、放つ。

その全てを弾き、『人物』は横にさつと飛びのく。

『人物』は壁に向かって切りかかった。

一、二太刀入れただけで、壁に『隣室』と繋がる、人一人通れるくらいに穴が開いた。

『人物』は吸い込まれるようにその穴へと入っていく。

「カイト!!!!」

僕は穴を通り、敵を追った。

『隣室』は大聖堂だった。

天井がかなり遠く、天蓋がある。

前方六メートル、そこに『人物』はいた。

天蓋から差し込む月の明かりを浴びながら立っている。

『人物』は僕の姿を確認して、構えを取る。

僕は『人物』へと跳躍し、一気に距離を詰めて斬りかかる。

爆音にも似た、金属が弾きあう音。

相手からのなぎ払いを、剣を地に垂直に向けて防御し、そのまま縦斬りへと転じる。

『人物』は難なくそれを防御し、さつと後ろに引いて僕から距離を取る。

それも束の間、即座に相手は猛攻へと転じる。

ガンガンガンガンガンと絶え間のない剣撃。

休む暇なんてあるはずもなく、防ぐことがやつと。

猛攻の反動に耐え切れず、僕の身体が宙に浮き始めた。

反動に次ぐ、反動で、地に足が着かない。

それでも、僕は防ぎ続ける。

何とかバランスを取れるように、適度に衝撃をずらしながら防ぐ。だけど、このままだと……。

「カイト！！よけて」

後ろからのセルフイの声。

僕は下からの斬り上げを防ぐと、身体を捻り、攻撃へと移った。

横からの水平斬り。

相手はそれを叩きつける様に斬りこみ、威力を殺す。

だけど、これはダメージをねらったものじゃない。

横からの攻撃に対して、敵は力を込めて切り伏せた。

すると反動は横からのものとなる。

自然、僕の身体は空中に浮いているものだから、『反動』に抵抗できず、横に吹き飛ばされる。

あとは……。

十三発分の銃声。

弾丸は全て弾かれたけど、仕切り直しには十分だ。

僕は素早く相手に近づくと、あらん限りの力で斬り上げた。

天高く舞う相手の身体。

その後を追う形で僕とセルフイは跳躍する。

空中戦。

僕の斬り込み、その最中の、セルフイによる射撃。

どちらも器用に、相手は防ぐ。

「うつ……！」

相手はセルフイの腹部に蹴りを入れる。

セルフイは受身こそは取ったが、そのまま大聖堂の木製の長イスに激突した。

空中で、ガンガンガンガンと尚も激しく交戦する。

上から下への斬り叩くも、防がれる。

相手の右からのけさ斬りを身体を捻ることで間一髪で回避すると、その勢いを利用して水平に斬りつける。

防がれ、また攻撃を仕掛けられる。

着地し、距離をとる。

「もう、終わりです」

構えた僕に、『人物』は言う。

「剣、耐え切れそうにないです」

それは自分の剣のことではなく、僕の剣に対する言葉だった。

手にしている剣は、激しい斬り込みのせいで刃が崩れかけていた。

「そうだね。確かにそうだ」

そう言つて、僕は持っていた剣を捨てた。

剣は刃先から地面に当たり、折れた。

「だけどね、僕は君とまだ戦える」

右手に光が集まる。

瞬間、手にはさつきまでとは違う剣が握られていた。

「これ出すのも久しぶりだよ。二年ぶり・・・かな？」

「二年・・・？」

「そ。二年前にちょっと」

「あなた・・・？」

「うん？」

「貴方の名前は？」

「カイト、今はそう名乗ってる」

「・・・そう、ですか。」

言つて、『人物』はフードを脱いだ。

その時、蒼色の腰まで届く長い髪がふわりと空気を泳いだ。

蒼い瞳をした少女が僕を見つめる。

「私の名前はアヴリル。十三階段の一人」

「十三階段？」

「・・・」

意味ありげなキーワードを放った後、アヴリルは黙り込んだ。

これ以上言うことはないらしい。

「わかった。それじゃもう・・・、」

「決めよう」

EP3

- 自分が人間だって事、証明して下さい -

「・・・・・・・・です。」

ん？

「・・・・・・・・さです」

んん？？

「朝です、いい加減起きやがって下さい、カイト兄様。」

目を開けると喉元にナイフを突きつけられていた。

皮膚と刃の間、約三ミリ。

「おはよう、イルファ」

なるべく喉を動かさないように、声を殺しながら朝の挨拶。

「おはようございます、カイト兄様」

『イルファ』と僕が呼んだ、エプロンドレスを着た目の前の少女は喉元のサイフをすつと引いた。

僕はベッドから身体を起こした。

腹部と左手に、鋭い痛みが走る。

見ると、どちらともぎつしり包帯が巻かれていた。

「昨夜、」

イルファが続ける。

「お二人の帰りが遅いので、寺院まで様子を見に行きました」

「へえ、どうして寺院だとわかったの」

「セルフイ姉様が書置きをしてくださったので」

まあそんなとこだと思ったよ。

イルファは吸い込まれそうな瞳で僕を見つめる。

肩まで伸びた、雪の様に真っ白な髪に紅い瞳。

僕より二つ下の年齢で、まだ幼さが残る、それでいて整った顔。普段は無表情で、口数も僕達三人の中で一番少ない。

背はセルフィより低い、だけど、そのくせ発育具合どうしてなかなかセルフィよりも・・・。

「どこをマジマジと見てるんですか？」

再度、ナイフを突きつけられた。

「いや、別に」

「どこを見てたんですか？」

「いや、別に」

「どこを見てたんですか？」

「なんでセルフィより背が低くて年も下なのに胸がデカイのかなあ
と」

「・・・殺しますよ？」

「すみませんでした」

華奢な体にメイド服、反則です。

はぁ、とため息をついてイルファは僕の部屋から退出しようとした。

「呆れられた？」

「前々からです」

「ひどいな、僕は君の事を愛してるのに」

『愛している』

その言葉に、頬を赤らめるイルファ。

時々見せる照れが何ともチャームなおんなのこ。

「・・・みだらです。カイト兄様」

そう言つて紅い顔に無理に取り繕った普段の顔をしながらパタンと扉を閉めた。

「はは」

「それと、」

ガチャリとドアを半開きにし、首だけを僕の部屋に出してイルファはこう言つた。

「カイト兄様。やはり二年間、何もしなかったのは明らかに間違っていたとお分かりになりましたか？」

さっきの愛の言葉への反撃。

捨て台詞、身に染みる。

「何もしなかったわけじゃないさ」

「そうですか？」

「そうだよ」

わかりました、と言って一礼をした後、イルファは扉を閉めた。

「・・・礼をするくらいなら、ナイフを使って起こすの止めてよ」
小さな声で、僕はボソッとそう呟いた。

イルファとセルフイとは二年前に出会った。

出会うべくして出会ったのか、それともたまたまそうであったのか、それは僕にはわからない。

特にイルファ。

二年前、僕と彼女は正に対極だった。

勢力『機関』No.8 通称『ピリオド』

彼女はそう呼ばれていた。

敵であったイルファは、僕にとって凄まじいほどの脅威だったし、それは向こうも同じだったと思う。

そして戦いの後、彼女は色々あって僕と一緒にいることになった。

『一緒に生活』ではなく『一緒に生きる』ことに。

それが悪いことなのか、良いことなのかはわからない。

ただ、その時には他に選ぶべき選択肢がなかった。

僕はベットから立ち上がった。

ずきずきと全身に痛みが走る。

窓から見える青空が、目に痛かった。

ここでちょっと僕達が住むこの国について。

この国は三つの区画から成り立っている。

商業区、生活区、農業区からだ。

その内の商業区、二番街に僕達の家（兼請負店）はある。

商業区は工業に限らず建築、土木、経営、すべての『職』と名のつくものがあつまる区画で、

人も物も、どの区よりも一番多い。

言うならば都市だ。

そんなところで請負業をやってるからか、依頼人もほどくる。

月に2、3依頼があれば大繁盛といえるこの職業で、月に3、4依頼がくる。

普通の請負業だと一回にかなりの額を請求するらしいけど、僕達はとりわけセルフイは一生働かなくても

食べていけるだけの財産があるので請求額もかなり小額。

そこが繁盛（？）の根本たるところかもしれない。

物探しから尋ね人、たまに殺人依頼なんてものもくるけど、それらは全てセルフイが依頼を受けるかどうか判断する。

ちなみに殺人依頼を受けたことは一回もない。

殺人依頼者に「他に頼めー！！」と一喝するのを何度見たことか。

まあ一人だけ、同業者で殺人を専門にしている『知り合い』がいるけど。

ちなみに仲間であり、かつ、敵という微妙な関係。

家は二階建てで、結構広い。

どうしてまだ未成年の女の子であるセルフイが、こんな豪勢な家に住んでいるのかは知らない。

その内聞いてみようと思ってる。

一回は居間が半分、仕事部屋がもう半分で埋まっており、二階に各々の個室があるという形になっており、眠る時だけ二階にいて、あとはほとんど一階にいるのが日常になっている。

炊事や掃除、一般的に家事と呼ばれるものはイルファがやってくれている。

本人曰く、『メイドですから当たり前です』らしいが、僕もセルフイも一度だってイルファに家事をしてくれと言ったことは無い。どうやら家事が生きがいになってる模様。

「おはよう」

いつものように、僕は居間の扉を開けた。

「ほひゃよう」

いつものように、パンをほおばりながらセルフイが僕に朝の挨拶。

「食べ終わってからにしてよ」

「んんっ、おっ、おはよう」

「おはよう、イルファもおはよ」

いつものように、今朝二度目の挨拶

「おはようございます」

いつものように、深々と礼をするイルファ。

いつもの日常。

昨夜のことなんて忘れちゃうくらいに。

「決めよう」

『想影』

いつの間にか、僕がそう呼称するようになった剣を握り締める。
なぜそう呼び始めたのかはわからない。
気付いたら僕はこの剣をそう呼んでいた。
否、そう呼ばないといけない気がした。

距離を取る。

左右には長イス。

僕達は今、大聖堂の中央、広い通路の上で対峙している。

一撃にかける、そんなの無理だ。
それこそ乱打戦になる。

あのなまくらな剣だとまともな戦いが出来なかったけど、『想影』
なら話は別。

別に、僕自身が剣によって強くなるわけじゃない。
ただこの剣が僕に力を与えてくれる、そんな気がするだけ。

ふっ、と息を吐いて、アヴリルに向かって駆け出す。
構えを変えるアヴリル。

地に刀を付ける構えから、刀を肩より高く持ち、刃先をこちらに向けている。

明らかに『突き』の構え。

ガンッ！

突きを弾く。

そのまま上段へと水平斬り。

アヴリルは首だけの最低限の動作でそれをよける。
斬撃が続く。

がんがんががんががんがんと、剣同士を叩き付け合う音が、大聖堂の内部に響く。

僕はアヴリルの二度目の突きを腰をひねって半身で交わし、その際の勢いを維持したまま後ろ回し蹴りを見舞う。

牽制のつもりの攻撃が、幸運にもみぞおちに深々とつきささり、華奢な体がよくめく。

その隙を見逃さない、見逃してやらない。

僕は『想影』を振りかぶり、ありったけの力で叩き付けた。

かろうじて攻撃を刀で防御するアヴリル。

だけど、その『威力』までは殺せなかった。

アヴリルの体はまるで思いつ切り蹴られたボールの様に、蒼い髪をたなびかせながら派手に後方に吹っ飛んだ。

その後ろには、石でできた巨大な女神像。

瞬時、爆音。

アヴリルの体は女神像に激突した。

僕はアヴリルに向かって跳躍する。

ここだ。

ここで、流れ《勝敗》が決まる。

アヴリルの体が前のめりになる形でゆっくりと傾いていく、否、倒れていく。

全てがスローモーションに見える錯覚を感じる。

距離を、つめる。

僕とアヴリル、その距離、あと四メートル。

三メートル。

『想影』を振り下ろす。

狙いは、アヴリルの、細い首元。

刃先が、あと少しでそこに達する。

もう、あと数刹那後には、その首は……。

「!!!?」

視界。

気付く。

目の間の少女。

アヴリル
異端者。

蒼い髪。

蒼い瞳。

それが、

僕を、

捉える。

脳髓を駆け巡る、狂気。

右手。

僕の利き手。

剣を握る腕。

力が、

一瞬、

消えた。

『ずしゃっ』と、音。

赤黒い液体が、地を濡らす。

結果的に、アヴリルは僕の斬撃を防いだ。

その左肩を、斬らせて。

刃先はアヴリルの左半身を断絶しておらず、そのまま左肩にささっている状態。

途中、僕は剣を振る勢いを弱めてしまった。

ひゅんと風を切る音。

アヴリルの反撃はもう始まっている、

「くっ!!」

無理やりアヴリルの左肩から剣を引き抜く。

おびただしいほどの血が飛沫となって空中を舞う。

ひるむことなく、アヴリルは刀を振るう。

異常。

異質。

壊れている。

ガンッと一際大きな音。

斬撃を防ぐ。

だが、若干無理な体勢からの防御だったため、僕の体は威力を抑えきれずよろめく。

相手を見る。

アヴリルは、微かに笑っていた。

その微笑にぞっとする。

左肩を深く斬られ、今も洪水のようにそこから血を流しているというのに、彼女は微笑んでいる。

「がはっ!!」

膝蹴りを腹部に食らう。

直後、激しい斬撃。

ままならない姿勢のまま何とか防ぐ。

続けざまに、まともな呼吸が出来ないほどの乱撃。

その斬撃は、まさに剣舞。

「貴方は……」

アヴリルが口を開く。

斬撃を緩めず、より一撃一撃に重み《……》を加えながら。

「どうして私と闘ってるんですか？」

「……」

がながんがながんがん。

「何の意味もないでしょう？」

「……」

がながんがながんがんがんがん。

「どうしてですか？」

「……」

がながんがながんがんがんがんがんがんがん。

ガッ。

「それはね、」

「!？」

驚くアヴリル。

僕はむりやりにアヴリルの攻撃を停止させた。

左手でアヴリルの刀を直に掴む事によって。

手から血が滴り落ちる、それも結構な量が。

まあ、左手ごともっていかれるよりマシかな。

「ごもつものことさ。確かに僕が君と闘う理由なんてないね」
「……」

刀を引き抜こうとするアヴリル。

だけど僕は離さない。

「ただ」

「僕の周りには、何かしら奇妙な事がよく起こるんだよ」

「・・・・・・」

「些細なことから大きな事まで、何でもかんでも色々だね」

「・・・・・・」

「僕には一つだけ自慢がある」

刀を握る手に力を込める。

血がさらに流れる。

血溜まり

足元にはすでに水たまりが出来ている。

自然と、笑みになる。

「僕は一度、殺された」

何の比喻もなく、ありのまま純粹に。

「その日以来、奇妙な出来事が起きているんだ」

その最たるものが、二年前。

「そして、僕がその『奇妙な出来事』に首を突っ込むときには必ず・

・、」

「・・・・・・」

「大きな戦争『殺し合い』』が起きてるんだ」

国同士みたいな大規模なものではなく、地殻変動のような、公けには見えない『隠れた戦争『殺し合い』』が。

「・・・そうですか」

蒼い瞳^めで、僕をじっと見るアヴリル。

「でしたら今度も、」

「！」

アヴリルの言葉に気を取られて、反応が遅れる。

気付くとアヴリルは、左手にもう一本、刀をもっていた。ていうことは、アヴリルはもともダブルハンド《二刀流》だったのか。

「がっ……！！」

避けきれず、刀が僕の右腹部に深々と突き刺さる。

途端に意識が遠のく。

やばいな、やっぱり素手で刀を握るのは無茶だったかな……。

血、流しまくっちゃったし。

アヴリルの後姿が見える。

もう……、ここ《寺院》を出て行くのかな。

もやがかった意識の中で、僕は自分の体が無様に床に倒れたのを感じた。

意識が途絶える瞬間、アヴリルは僕に振り返ってこう言った。

「あなたは私達の戦争《殺し合い》に関わることになるでしょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2091c/>

D / R

2011年1月26日04時20分発行